

(別紙2)

審査の結果の要旨

氏名 戸内 俊介

文法化 (grammaticalization) とは、実質的な意味を表す語彙や構造が、文法的な機能を果たす語彙や構造に変化するプロセスを指し、広義には既に文法化した言語単位が、より抽象的な文法機能に拡張するプロセスも含まれる。本論文は、紀元前の上古中国語における「于」「而」「其」という3つの語を取り上げ、それぞれの文法化ないし拡張のプロセスについて詳細な分析を試みることを通して、中国語文法史研究の方向性の一つを示そうとしたものである。

第一章は、文法化理論と中国語における文法化研究の現況を概観し、使用するコーパスについて解説する。古典的な伝世文献の他、殷代の甲骨文、西周時代の青銅器銘文、秦漢時代の簡牘など、出土資料を用いた研究の重要性が述べられ、これが本論文の特徴の一つとなっている。

第二章は、甲骨文における時間を導く前置詞「于」の文法化プロセスを論じる。従来は、移動動詞「于」(至る)が地点を導く前置詞を経て時間前置詞に変化したと見られていたが、筆者は、甲骨文における「于」は現時点や過去時を導くことはできず、明らかな未来時指向があることを検証した上で、移動動詞に由来する着点を導く準動詞「于」が、隠喩によって時間領域に写像されるプロセスを描き出した。

第三章は、春秋戦国時代から秦漢時代に見られる「NP 而 VP」構文の成立過程を取り上げる。当該構文は、動詞句を接続する「VP 而 VP」から拡張した構文であると見られ、「弓人而恥爲弓」(弓職人なのに弓を作るのを恥じ)のように前項と後項との間に逆接関係が成り立つことが知られている。筆者は、等位接続詞「而」がNPを述語化することによって属性的な意味を際立たせ、聞き手の注意を喚起した上で、後項では前項の一般的な有様から逸脱する事態を述べ立てる構文であると分析する。これを聞き手に配慮した相互主観的 (intersubjective) 表現とする筆者の主張には疑問も残るものの、「而」の接続詞としての機能をより明確化した点は成果と認め得る。

第四章は、殷代から戦国時代に至る法副詞「其」の用法を断代的に分析する。従来の研究では、推量・命令・意志・仮定など、語義列挙的な説明に終始することが多かったが、筆者はその核心的意味を、命題を非現実の領域に定位して表現する irrealis マーカーと仮定した上で、発話環境によるバイアスによって多義性の由来を説明する。命令文における「其」が上位者に対する敬意を表すポライトネス機能が西周以前には見られず、語用論的強化によって春秋以後に獲得されたことなどは、従来にない指摘である。

理論的な考察や用語の使用にやや慎重さを欠く等の問題点も残されているが、難解な出土資料を使いこなし、これまで十分には解明されてこなかった言語変化のプロセスを、先行研究を上回る精度で記述した点は高く評価される。よって本審査委員会は、本論文に対し、博士(文学)の学位を授与するに十分な成果であると判断する。